パーキンソン病とは

日本では 20 万-30 万人の患者さんがいます

パーキンソン病はめずらしい病気ではありません。日本全体で約３０万人の患者さんがいると推定され、超高齢化社会が進むにつれて、今後ますます患者数は増えると予想されています。

適切な薬物治療と運動療法を受けることによって「年齢相応の自立度の高い生活を送り、健康寿命を延長する」ことが社会的なニーズとなっています。

中高年に多い病気です

パーキンソン病は 50、60 歳代で発病することが多いのですが、70 歳以上の高齢者で発病することも稀ではありません。逆に 20～30 歳代（多くの場合、遺伝性）で発病する方もいます。

元ボクサーの故モハメッド・アリ、俳優のマイケル・J・フォックスなどもパーキンソン病で有名な方々です。日本人では、故岡本太郎さんや故永六輔さんが有名です。

脳内のドパミンが不足します

パーキンソン病は脳幹の中脳黒質の神経細胞がゆっくりと徐々に変性し、少なくなるために大脳基底核（線条体）においてドパミンという神経伝達物質が減少する病気です。線条体におけるドパミンは、我々がスムースに運動するための調整を行っているので、ドパミンが不足すると、動作がぎこちなくなったり、遅くなったり、小さくなったり、少なくなったり（動作緩慢)、手足がこわばったり（固縮)、また震えたり（振戦）します。 さらに、脳内のドパミンが減少すると、ヤル気がなくなったり、うつ状態になったりすることも知られています。

病気の原因はまだよくわかっていませんが、現在、世界中で活発に研究が行われています。

的確な早期診断と適切な治療が大切です

パーキンソン病の運動障害は、通常は体の片側（右または左）から始まるのが特徴ですが、症状がゆっくり進行するために、患者さん自身が気づかないこともあります。

また同じような症状を示す病気が他にもあるため、せっかく医療機関を受診しても、見逃されたり、整形外科や精神科の病気などと間違われたりして、何年間も放置されることも決して少なくありません。

さらには「スルピリド（ドグマチール®など)」「メトクロプラミド（プリンペラン®など)」などの《ドパミン阻害作用のある薬の副作用》によってパーキンソン病に似た症状が出現することもあります。

　早く正しい診断を受け、それに基づく適切な治療を受けるためには、神経内科専門医にかかることが大切です。

トータルケアガーデン湘南海老名クリニック パーキンソン病外来